

公開講座活動報告

法人・団体名 福井県母性衛生学会

講演タイトル

① 将来、健康なあかちゃんを授かりたいあなたへ -今、意識しよう ファティリティ・アウェアネス-

② 若年女性がん患者さんの将来の妊娠・出産の可能性を考える～がん・生殖医療の実践

講師

① 上澤悦子教授（福井大学医学部看護学科臨床看護学講座）

② 鈴木直教授（聖マリアンナ医科大学医学部産婦人科学講座）

開催年月日 平成27年6月20日 13時30分～16時30分

会場 福井市地域交流プラザ（福井市）

講演概要

① 2012年の生殖医学登録報告によると、わが国の生殖補助医療による出生児は37,000児となり、全出生児の27人に1人の割合を占めるに至った。生殖補助医療の進歩により多くの不妊女性が恩恵を受けているが、その一方でこの数字の中には、32万件の不妊治療周期中の約10%しか出産に至らない現状と、生殖補助医療により出生した児が将来被る健康リスクが包含されている。晩婚化が進んだ現代において、夫婦となる男女が、「望んだ時に」、「健康な子どもを」、「自然に」、授かるためには、思春期・成人期前期の男女を対象にしたファティリティ・アウェアネス健康教育（不妊を意識した生殖に関する教育）が重要となる。本講演では、男女の身体構造の違いや精子と卵子の特性といった妊孕能に関する基本的な知識の解説の後、食事や嗜好品などの生活習慣が妊娠する力にどのように影響するのかについて分かりやすい説明があった。将来の妊娠への備えを意識しながら日々の生活を送ることは重要である。本講演は参加者一人ひとりが自身のライフプランを検討する上で良い機会となった。

② 若年がん患者の将来の妊娠・出産に関するサバイバーシップの向上は重要で

ある。若年がん患者に対する妊孕性温存法としては、古くから配偶子や受精卵の凍結保存、卵巣位置移動術などが施行されてきた。2004年には、ベルギーのDonnez博士により、卵巣組織凍結・移植による世界初の生児獲得の報告がなされ、本法は新しい妊孕性温存法として臨床応用が進められてきた。本講演では、鈴木氏自らが行ってきた基礎実験から臨床応用に至るまでの経緯が示された。より多くの卵子を保存できるという利点を有する卵巣組織凍結は、欧米では全ての若年女性がん患者に選択肢として情報提供すべき技術となっている。本邦でも、2014年に「医学的適応による未受精卵子および卵巣組織の採取・凍結・保存に関する見解」が示され、実施体制が整いつつある。がん・生殖医療の発展は、将来の妊娠・出産の可能性という点において、若年女性がん患者に多くの福音をもたらすであろう。



